

・中津	5月22日	大教会	140名
・岐美	5月22日	大教会	300名
・那美岐	5月22日	大教会	110名
・南紀	5月22日	大教会	200名
・宇佐	5月22日	大教会	70名
・西成	5月22日	大教会	70名
・小南部	5月22日	大教会	130名
・中河	5月23日	大教会	350名
・南阿	5月23日	大教会	150名
・此花	5月23日	大教会	150名
・亀岡	5月23日	大教会	80名

・北	5月24日	大教会	232名
・櫻井	5月24日	大教会	200名
・島ヶ原	5月24日	大教会	160名
・明城	5月24日	大教会	130名
・北陸	5月24日	大教会	146名
・神崎	5月24日	大教会	120名
・中背	5月24日	大教会	170名
・人事			
・業務記録			

20日	事務局連絡会
21日	『Happist』納品
23日	『Happist』梱包
24日	出版部部会
25日	委員会
26日	学修高校の部準備会議
27日	〈屋外〉まなびば研修会
6月4日	学生部部会
5日	学生連絡会
6日	要員育成室布教合宿（〜7日）
8日	教祖130年祭 学生おぢばがえり大会
9日	学修部部会
15日	学修大学の部研究室会議

学生担当者報

Vol.341

発行／天理教学生担当委員会 発行責任者／吉川万寿彦 編集責任者／松村孝吉
[TEL]0743-63-1511 (内線5817) (直通) 0743-63-2489 [FAX]0743-62-5780
[E-Mail]tsa@tenrikyo.jp [TSA website]http://tsa.tenrikyo.or.jp

立教178年
平成27年6月25日発行



私が高
校生の頃、
各教区で
は「まな
びば」の

前身である「高校生セミナー」が
開催されていました。初めて参加
した私は、出会う人達に緊張しつ
つも、その内容にすっかり魅了さ
れてしまい、心から打ち解けて、
時間も忘れてしまうほどでした。
それから随分と歳月は過ぎ、現在
は各教区で「まなびば」が開催さ
れています。
時代と共に内容や進め方は変わ
ったものの、今も変わらないのは、
学生のお世話取りにあたってくだ
さる先生方の「何としても学生を
喜ばせたい」、「学生に信仰の喜
びを伝えたい」という切なる願い
ではないでしょうか。当時の先生
方の中には、お話の最初にマジッ
クから始めるといった工夫をされ
る先生や、また会場近くにあった

学生に伝わる言葉で

お城周辺でオリエンテーションの
ようなこともしてくださったよう
に思います。

先日、ある教区の「まなびば」の
映像を拝見しましたが、今も変わ
らず学生に向き合い奮闘されてい
る担当者の姿がそこにありました。
その姿から、「高校生セミナー」
から「まなびば」へと、私の学生時
代から今の学生の世代まで繋がっ
てきたのは、繋いできてくださっ
たからなんだ、また繋ぐうとして
くださったからなんだと改めて感
じました。今、担当者として学生
と接する中に、どう伝えれば学生
の心に伝わるのか、試行錯誤の毎
日であります。教祖は私たちに親
心をもつて、あらゆる方法でこの
教えを伝えてくださいました。私
たちは日頃から相手に言葉で伝え
る時にどれだけ心を込めているの
か、また相手の立場に立って伝え
ようとしているのか、自分の子ど
もでさえも難しいところです。

人材育成部 委員

豊田 章宏

「まなびば」では、たった二日
間ですが、どれだけその地域にお
ける学生同士のつながりを作り、
また学生同士だからこそ信仰的
にも学び合える場所になってけれ
かという観点から、屋内・屋外に
分けてプログラムが考えられてい
ます。それぞれ魅力は違ったもの
ですが、スタッフの「学生に信仰
の喜びを伝えたい」という熱い思
いのもとに、全国の担当者の方々
が奮闘してくださっています。
昔も今も変わらないのは、学生
一人ひとりに真剣に向き合っ
ださる担当者の姿であります。こ
の先に信仰が続いてくためにも、
学生も道の次代を担う大切な一人
として、また私たちも同じよう
くとして、共に歩めればと思っ
ております。
今後とも、「まなびば」により
多くの学生が参加できますよう
にご丹精賜りますよう、どうぞよ
ろしくお願い致します。

教祖130年祭 学生おぢばがえり大会

全教会からの参加を目指して

立教179年 3月28日 午前10時 大会動員目標

1万人

教祖百三十年祭 学生おぢばがえり大会

学生担当者決起の集い 開催報告

去る五月二十五日、本部第二食堂を会場に、来年三月二十八日に開催される「教祖百三十年祭 学生おぢばがえり大会 学生担当者決起の集い」を開催し、六百四十七名が参加しました。

例会に代えて諸連絡を行った後、教区・直属巡回用に作成されたDVD「次代を担うようぼくへ」を上映しました。続いて秋岡副委員長より、「教祖百三十年祭 学生おぢばがえり大会 動員の栞」に基づいて、大会に向けた具体的な動きを説明し、中でも大会パンフレットと、DVD「次代を担うようぼくへ」の積極的な活用を呼びかけました。

その後、大会実行委員長である第五十二期天理教学生会委員長日水信悟君が壇上に立ちました。日水君は自らの経験を通して、お道の仲間が身の回りにいるこ

との有難さについて話し、そして、周囲の仲間に声をかけることは学生だからこそできる大きなおたすけだと捉えて、教祖にお喜びいただけるよう、しっかりとおたすけに励むことを誓いました。

続いて、学生担当常詔 西浦忠一先生よりお話をいただいた後（三〇九頁に掲載）、吉川委員長が挨拶をいたしました。まずは教祖百三十年祭に向けた学生の年祭活動、おたすけの動きをしっかりと後押しすることに組み合わせていただき、その上で「教祖百三十年祭 学生おぢばがえり大会」への全教会からの参加を目指して、学生担当者であるお互いが根気と気配りをもって学生の丹精に力を注ぐことをお願いしました。

最後に、よろづよ八首総立ちを参加者全員でつとめて「学生担当者決起の集い」



を閉会した後、動員の上で必要となる教区と直属の連携を推し進めていくため、双方の顔合わせの時間を持ちました。

「教祖百三十年祭 学生おぢばがえり大会」まで残り一年を切った今、学生担当者であるお互いが何をすべきかを改めて考え、決意を新たにする場となりました。



皆様方には「教祖百三十年祭 学生おぢばがえり大会 学生担当者決起の集い」にお集まりいただき、誠にありがとうございます。

私は、四月一日から学生担当常詔の御命を頂きまして、再び学生層の育成に、皆様方と共に歩ませていただくことになりました。

「教祖百三十年祭 学生おぢばがえり大会 学生担当者決起の集い」担当常詔 西浦忠一先生お話し

した。

実は、今日お話しすることになってから、どんなお話をしようかとずっと悩んでいたであります。そうした中、籍を置く道友社に、学生会の第四十五期委員長を務めた福島芳明君という課員がおりますので、昨日も一緒に「どんな思い出がある？」という話をしていたところ、彼から非常に感動する話を聞かせてもらいました。福島君の次に委員長を務めた河西郁美さんについてのエピソードです。

彼女も、非常に一生懸命務めてくれた思い出深い委員長の一人です。福島君によると、四月の本部月次祭が終わって、夕方JR奈良駅へに、い、げ、に、行、っ、た、と、こ、ろ、、ぱ、つ、た、り、彼、女、に、会、っ、た、と、い、う、の、で、す。彼女が若い学生を三、四人連れて一緒に歩いていたら、何をしているのかと話を聞いたところ、こんな答えが返ってきたそうです。「実は、おぢばに帰ったときに、かつて学修大学の部でカウンセラーを務めたと

きの学生たちを誘って、『教祖百三十年祭 学生おぢばがえり大会』に向けての伏せ込みとして、に、い、げ、に、出、て、い、る、ん、で、す」と。この活動は、心定めとして毎月行っているもので、学生会を通して、とりわけ教祖百二十年祭の年の大会を通してお育ていただいたことへの、ご恩返しのお気持ちでさせていただいている、という話をしてくださいました。

私は、この話を聞いて心が震えました。なんて素晴らしいのだと。やはり学生会、学担に関わっている人は素晴らしいなと思いました。と同時に九年間学担でお世話になったにもかかわらず、何のご恩返しもできずにいる自分が非常に情けなくなりました。今回この御命を頂いたからには一生懸命に務めさせていただかねばならないと、また、そのように皆様からも言われているのだと、しみじみ感じております。今、こうして大会に向けて、担当者や学生の方々と共に動かさせていただける。本当に素晴らしい。

しいことだと思います。

吉川万寿彦委員長に「今日はどういう話をすればいいのか」と尋ねましたら、十年前の「教祖百二十年祭 学生おちばがえり大会」の思い出と、皆様方への激励、そういうものを含めて話をしてほしいと言われたのですが、なかなか十年前のことというのは思い出せない。そんな中、最初に思い出したのは、当時の学生部長で、大会プロジェクトチームのリーダーを務めた南阿大教会長の岩佐田秋君のことです。実は、このプロジェクトにおいて、彼は血を吐いたのです。なぜ血を吐いたのかというと、プロジェクトチーム会議のストレスと、プレッシャーがよほど強かったのでしょう、胃をやられてしまったのです。それくらい、ストレスとプレッシャーがすごかった。参加者一万人達成というのは並大抵なことではないのです。

教祖百年祭の大会でも八千人です。教祖百十年祭の時は七千七百人ほどでした。今までの大会で一万人を超えたことはありません。一万人を超えるということは、普通にしていては絶対にできないことです。当

時の紺谷青春委員長は、婦人会、少年会、青年会の例会やかなめ会、教区長会、大学や高校、学校本部へ出向くなど、あらゆる所まで動き回ってくれました。また、十萬枚のチラシも作りました。それから、全教会長宛ての案内、お願いの手紙も送らせていただいた。とにかく、できることは何でもやろうという空気でした。

また、当時は学生会といっても教区の学生会がまだまだ主体であったので、直属教会への働きかけをしつかりしないとうまくいかないということで、教区・直属の合同懇談会の場を設けました。そこでは、直属が遠方のため、なかなか連絡が取りにくいという学生には、教区で面倒を見てもらうようにするなど、様々な連携体制が確立していきました。

また、直属に対しては「学生層育成者講習会」を全直属で開催していただきたいという旨を申し上げ、紺谷委員長がかなめ会へ出向いて、その度に「あと二十カ所まだの教会があります」「あと十数カ所になりました」などと伝えてくれました。まだ実施していない直属の会長さんは、ヒヤヒヤ

されたでしょう。そうしたこともあって、ほとんどの教会が講習会を開催してくださいました。本当に動きに動いたと思います。また、教祖百二十年祭の前年の春学は、ステップを踏むための春学でしたので、皆、力が入っていたのですが、当日はあいにくの大雨でした。紺谷委員長は実に雨男でありまして、見事に雨が降りました。いろいろと計画を立てていたのですが、それらがすべてできなくなり、急遽、殿内で式典を行うということになりました。

今でもはつきり覚えていることがあります。そのとき『灯』という曲を大会の歌にしようということで、全員で歌うことにしていたのですが、吹奏楽部による演奏もできず、「これをどうするか」ということになったのです。CDのカラオケがあつたので、放送通信課のスタッフに頼んで、「これを歌う時に流してください」と何気に言っていました。すると、「さあ『灯』の斉唱です」と司会が伝えるなり、殿内に思いきりエレキやラップが鳴って、ものすごい音が響いたのです。そして、学生たちが立って踊って歌い出したのです。それは

すごかったのですが、私はその光景を見て肝が冷えたというか、「えらいことをしてしまった」と思いました。殿内で音楽が大音量でかかるなんて、今ではあり得ないことです。何も考えずに課のスタッフに言っ

てしまい、後で絶対に怒られると思ってヒヤヒヤしていました。

式典も無事に終わり、真柱様をはじめ、来賓の先生方がお下がりになるとき、途中の東廻廊で、絶対にここで怒られるとヒヤヒヤしていたら、前真柱様がふと振り返られ、学生たちの方を見て「ええ大会やったな」と仰ってくださいました。そして、当時の板倉知雄内統領も、「本当に勇んだ大会やったな。素晴らしいな、学生会」と言ってくださいました。ヒヤヒヤしましたが、殿内で行ったおかげで、本当に皆の距離が近くなったというか、学生も担当者もみんなが心一つにすることができたように思います。

さて、「教祖百二十年祭 学生おちばがえり大会」についてですが、大会の前夜祭もすごかったのを覚えています。本部夕づとめ後に、おやさとかた南右第二棟前の広

場で前夜祭が催されました。夕づとめの後、みんなが移動するのですが、教庁前の陸橋が人、人、人で、橋が揺れるくらい次から次へと人が来て、私たちはその姿を見て「一万人は確実に超えた。ひよつとすると、二万人くらいいくのではないか」と思ったほどでした。前夜祭が終わり、総務で集計人数を聞いたところ、参加者は六千五百人でした。それを聞いて、「やはり一万人の壁というのは本当に厚いな」と思いました。紺谷委員長もしょぼんとしてしまいました。が、「でも頑張ろう」などと言ったりして、次の日の天気予報を見ると雨。それで紺谷委員長はさらに落ち込んでしまったのですが、大会当日は何とか天気ももちまして、中庭でつとめることができました。

迎えた翌朝、当日参加の学生が大勢来しました。前日は六千五百人だったのが、次から次へと増え、受付から無線に入ってくる人数が七千人を超え、八千人、九千人を超えて九千二百五十人に上ったのです。集計をしていた女子学生のスタッフが、喜びと緊張でポロポロ涙を流しながらやっていたのを、今でも覚えています。勢い余って、

某委員が「嘘でもいいから一万人いったって言いましょ」と言ったのですが、その女子学生は「先生ダメです」とビシッと言い返した。そんなエピソードもあります。結局一万人には届かなかったけれども、九千二百五十人という過去最高の参加者をご守護いただくことができたのです。

そして大会が終わり、真柱様がお玄関へお下がりになるときに、委員長が真柱様、前真柱様に九千二百五十人という数字をご報告させていただいたところ、本当に真柱様も前真柱様もお喜びくださって、お玄関前で学生たちを労ってくださいました。これは、全国の教会長や担当者の方々が「何とか一万人」と、「式典の真柱様のお言葉だけでも聞いてもらいたい」という思いで動いてくださった結果だと思います。また、学生たちも「何とかこの日だけでも」ということで、最後の崖っぷちの状況の中、仕切り根性、仕切り力で動いてくれたおかげなのだということをしみじみ感じさせていただきました。

この大会における参加者の割合は、教区五十パーセント、直属五十パーセントと、

学生担当者報

ちようど半分半分でした。直属による活動も段々と活発になつてきたということです。このとき、直属として最高の人数を動員したのが高安大教会でした。当時、同大教会の学生会委員長をしていた女子学生は、学生層育成要員として大学一年生のときから学担の事務局に来ていたので、私たちとも顔見知りで、いろいろと話を聞いていました。彼女によると、初めて春学に来たのが高校一年生のときで、当時、高安大教会からの参加者は二十人くらいだったそうです。それが、大会の前年には参加者百十三人という素晴らしいご守護を頂いたのです。

そして翌年の大会時、その女子学生が委員長を務める中、担当委員の先生たちと何回も話し合いながら寮回りをしたり、高安学生会のホームページをアップしたりして、一生懸命動きに動き回った。そして、参加者三百七十人という心定めをしたそうです。この三百七十という数字は高安大教会の教会数を元にしたものです。全教会からいうことで心定めをしたけれども、その前年の参加者は百三十三人です。その三倍に当

たるわけです。「夢みたいな話やな」と、そのときは思っていたようですが、実現するには自分たちだけではなく、教会の方々や学生担当の先生方とも協力しないとだめだということ、PRビデオを作って各部内の教会回りを始めます。また、関西・中部・関東の三会場に分けて、いろいろな集まりの場を持ったのです。

そして迎えた当日、一泊二日の初日の時点で集まった人数は二百五十人でした。それでも倍であります。心定め三百七十人には到底及ばなかったけれども、「これだけ頑張ったのだから悔いはない」という気持ちだったそうです。それが、翌日の大会当日、朝から当日参加の学生・生徒がどんどん来て人数が膨らんでいったのです。みんなと一緒に真柱様のお言葉を聞かせていただけ。感謝の気持ちが溢れ、ここに居られるということが何てありがたいのだろうという思いがして、涙が流れたと言います。直属アワーで大教会の担当委員長の先生が発表した人数は三百九十九人でした。心定めの人数を遙かに上回り、しかも前年の百三十三人のちようど三倍のご守護を頂いた

のです。本当に夢みたいな話です。けれども、これは夢物語ではないのです。学生会や担当委員、会長の方々が動いたからこそ、心定めが達成できたのです。そうして喜びを味わうことができたという話を聞かせていただきました。

今、教祖百三十年祭へ向かう仕上げの年です。たすけの句と聞かせていただいております。私は、お道の情報が飛び交う道友社にいますが、ここ一、二年、特に今年に入ってから、不思議な話が山のように耳に入ってきています。不思議なたすけ話に共通している点は、やはり人が動いているということです。身上・事情を頂いた方も、とにかく動いている。また、その周りの人たちもそれを機に動く。動かなければ不思議は起こってこないのです。私自身、この旬に不思議なたすけを感じさせていただいております。たすけが動いていることを実感すると、妻とも話をしていきます。つい躊躇していたことでも、思いきって話をしたり、一步踏み出したりすれば、神様が後押しをしてお守護くださる。それが今の旬だということを、つくづくと感じさせていた

学生担当者報

できます。だから、今動かなかつたら損なのです。

年祭の元一日につきましては、皆様もご存じの通り、教祖伝に書かれてあるように、教祖が現身をおくしになるとき、おつとめを勤めてくださった先生の手は足りていませんでした。二千人とも三千人とも、竹の杭が粉々になるくらいの人が参拝に来たのですが、おつとめの手は足りていなかったのです。でも教祖は、そのおつとめの音を満足げに聞いておられた。なぜ満足げに聞いておられたのか。それは、その先生方が「命捨てても」の心で勤められたからです。その心を教祖はお喜びになったと思うのです。やはり、形よりも心なのです。その心をお受け取りくださったのです。

今の私たちにも同じことが言えると思うのです。私たちがまず教祖に満足していただくには、喜んでいただくにはまず、私が是非つとめさせていただき、自分がこのひながたの道を通らせていただきますと願うことです。その姿に教祖は必ず喜んでくださる。この「命捨てても」の精神を言い換えたならば、自分は教祖のためならど

んなことでも苦勞させてもらいますということ定めになると思うのです。

名古屋で布教に励んでいたときのことで、月次祭には、大抵父が来てくれていました。私の父は今、八十二歳ですが、非常に元気です。また、非常に真面目な人で口数が少ない人です。たまに来たとき、何か勇むようなことを言っただけというのですが、なかなか言ってくれない。参拝者が多いときには、「今日にはぎやかで良かったな」などと、私としてはどこか褒めてほしいのです。でも、そんなことはひと言も言ってくれない。その代わりに、最後に必ず言っただけの言葉があるのです。私の方を向いて、「おまえ、もつと苦勞を求めさせてもらえ」と言うのです。私は毎月それと言われる度に、申し訳ないことですが、「これ以上どうせえと言ふんや」と不足をしていました。でも、今にして思えば、不足をして申し訳なかったなと思います。苦勞とは、求められるときに求めないといけないのです。「苦勞は先の楽しみ」「苦勞は宝や」と言ってくれた父の言葉が、今本当に身に染みます。

苦勞は不幸ではない。若い子の中には、苦勞は不幸だと思っている子が多いように思います。しかし、苦勞は先の楽しみです。ですから、この旬、三年千日の旬は、教祖のひながたを求めて、自らが苦勞を求めさせていただく旬だと思うのです。今日お集まりの担当者の皆様方も、担当者として好むと好まざるに関わらず、この御用を与えていただいたということは、そこに神様の深い思いが込められているわけです。それを自覚しながら、その中に苦勞を求めていく。これが大切なことではないのかと思わせていただきます。

私は、学担の委員をさせていただいてるとき、常々、前真柱様から「次代を担う若い人たちを育てる」というのは、これはにをいがけ、おたすけだと思ふ。にをいがけ、おたすけの心でやらなければできないと思ふ」とお聞かせいただきました。つまり、布教の心でつとめることが大切だということです。

私たちは、元なるを、やの思いをにをいがけることは、ようばくに委ねられる使命であると聞かせていただいています。ならば、

学生担当者報

そのためには、やはり私たちが動くことです。一にも二にも、やはり動かなければ風も何にも起こりません。一番だめなのは、じっとしていることではないでしょうか。を、やの思いを知らない学生たち、若者たちに、私たち一人ひとりが声をかけていかなかったら、彼らとは出会えないし、その子たちは一生お道との出会いがないかもしれません。一度誘ったくらいでは、「行きま

しい教えを伝えて、そうして私たちそれぞれがおたすけの現場をお与えいただくというの、一番肝心なことではないかと思うのです。そのおたすけの現場というのはどこに伸びていくのか分からない。無限の可能性があり、私たち信仰者にとって、それは大きなロマンであります。

ある教会の奥さんから、こんなことを教

今でも忘れられない経験があります。それは「学修・高校の部」のご報告のために、

えていただいたことがあります。「三回までは連絡ですよ。四回目からが丹精になるのです。何でもそうです。『こどもおちばがえり』のお誘いでも、ひのきしん隊のお誘いでも、何でもそう。一回断られたから、あかんではない。三回まではその人に連絡をしているんだ。四回目からが丹精になる。四回、五回と一生懸命に運ばしてもらうというのが大事なのです」と。本当にそうだと思わせていただいたのであります。一人でも多くの学生・生徒にこの素晴ら

前真柱様に参加者のご報告をしていたときのことです。直属別に参加者数が書かれてあったのですが、その中に参加者数ゼロの教会もありました。その集計をご覧になって、「わしはほんまに心配や」と仰ったのです。学生層育成の任に当たっている者が、もつと教会に働きかけるなどして、ご心配をかけないようにしないといけないという申し訳なさでいっぱいになりました。

校生も参加できるようになったことも併せてご報告申し上げます。その年、在籍者の子供で天理高校の生徒は五十人いました。そこで親御さんにも呼びかけをしたのですが、なかなかご理解を頂けなく、その年は六人しか参加してもらえませんでした。そのご報告をさせていただくと、前真柱様が「ほんまやったら全員行かなあかんのと違うんか。もしなんやったら、わしが言ってもいいぞ」とまで仰ったのです。それくらいのお心をかけてくださっているのだということを知り、当時「未熟会」の担当委員長として本当に申し訳なく、反省をしました。そして、この心をしっかりと伝えなくてはならないということで動いたのです。

学生担当者報

うに、「あの教区にはあの先生がいる。あの直属にはあの先生がいる。本当に仰る通りやな」と思っていました。しかし、その晩、自宅で反省をしまして、ムシがいてと仰ったのは、「おまえら担当委員長がムシにならずにどうするんだ」ということを仰っていたのではないのかと、はたと気づいたのです。「なんとという悟り間違いをしていたのか。人ごとではなく、自分がムシにならなければならないということを仰ってくださいっていたのだ」ということをしみじみと反省したのです。

私たちは、学担の御用を通して成人する

ばいけない、真柱様からお教えいただいた「育てる側の心得」についてお話しいたします。これは、平成十四年の担当者大会でのお話です。

機会をお与えいただいています。その間は、学生が好きで好きでたまらんと

「やはり育てる側は、学生たちより一歩も二歩も先へ進んでおかなければならない、と思うのであります。将来立派なよふぼくになつてもらいたいと思う、ならば、まず自らが一歩も二歩も先へ進んで、そして、思召に少しでも添うような立派なよふぼくに自分たちが育つように、自ら求めて育つ努力をするということが、大切だと思

ならなければならない。これは皆さま方

私どもお互いは、大会をはじめ、さまざま

同じだと思ふのです。本日お集まりの皆さん方、好むと好まざるとに関わらず、この御用を頂いているのでありますから、若い人を育てるムシになつて、共に一生懸命にこの大会に向けて動かしていただきたい。このように思います。

だと思ひます。学生層の育成というのは、未来へつながる大切な御用だと信じていま

最後に、私たちが肝に銘じておかなけれ

とお願いいたします。

す。どうか皆さん、この真柱様の思いにお応えできるように、私たち担当者、育成者が「学生層への働きかけイコール布教」なのだということを改めて心に治めて、十年先、二十年先を見据えて、この道を担ってくれるであろう若者に、しっかりと力を入れて働きかけをさせていただきたいと思ひます。

学生生徒修養会 高校の部 送迎実施一覧

「立教178年 学生生徒修養会 高校の部」において、系統を問わず受講生の送迎を行う予定の教区・直属を報告いたします。各教区・直属の送迎担当者の連絡先を掲載いたしますので、詳細につきましては送迎担当者と直接打ち合わせていただきますようお願いいたします。

「学生生徒修養会 高校の部」の動員の上にご活用ください。

都道府県	教区・直属	送迎担当者	連絡先
北海道	北海道教区		
東京	都大教会		
新潟	新潟大教会		
石川	石川教区		
福井	福井教区		
山梨	甲府大教会		
長野	長野教区		
岐阜	岐美大教会		
静岡	山名大教会		
京都	亀岡大教会		
兵庫	兵神大教会		
広島	広島教区		
山口	防府大教会		
	山陽大教会		
徳島	徳島教区		
愛媛	愛媛教区		
福岡	西海大教会		
大分	中津大教会		
宮崎	宮崎教区		
鹿児島	鹿児島教区		

Check it out !

今年も「学生生徒修養会 高校の部」の携行品一覧をTSA Websiteにアップしております。是非ご活用ください。
<http://tsa.tenrikyo.or.jp>

「教祖130年祭 学生おぢばがえり大会」
直属分教会合同巡回開催要項

日々は、学生層育成の上に変わらぬご丹精をいただき誠にありがとうございます。

学生担当委員会では、立教179年3月28日に開催する「教祖130年祭 学生おぢばがえり大会」には、学生会が掲げる1万人という動員目標をご守護いただくためにも、全ての教会から学生がもれなくおぢばがえりできるよう全力で取り組むことを打ち出しました。つきましては、大会の趣旨徹底と、動員についての説明とお願いのため、直属学生担当委員、学生スタッフを対象として、直属分教会合同巡回を実施いたします。

教務ご多忙の折とは存じますが、ご参集くださいますようお願いいたします。

尚、参加が難しい場合は、教会長様と相談の上、代理を立てていただいてもかまいません。

記

- 【期 日】 立教178年8月25日（火）
- 【時 間】 午後2時～3時30分（受付 午後1時30分～）
- 【会 場】 南右第2棟
- 【対 象】 直属学生担当委員長、委員、学生スタッフ 等
- 【内 容】 ・巡回講話
・「教祖130年祭 学生おぢばがえり大会」趣旨説明
・DVD「次代を担うようぼくへ」上映
・質疑応答 他
- 【申し込み】 申込み用紙を8月4日までにご提出ください。

提出締切：8月4日 FAX可（0743-62-5780）

「教祖百三十年祭 学生おぢばがえり大会」について

◆直属巡回日追加一覧

直属	開催日	直属	開催日
東	9月20日	静岡	9月18日
明和	9月24日	双名島	8月18日
愛知	7月12日	松阪	8月31日
繁藤	8月24日	淀	11月23日

※以前の掲載より追加のあった直属

学生生徒修養会五十年の歩み
―その二―

学生生徒修養会開催

昭和三十九年より「学生生徒修養会」が開催されることとなった。

二代真柱様より、

同じ事を繰り返すのではなく、それを積み重ねておさづけを頂いた暁には、教会長の資格を与え得る教人に迄育つ事の出来るよう内容を逐次高めて楽しみを与えるように

とのお言葉を頂き、検討された「学生生徒修養会」は、受講回数によって一回目を前期、二回目を中期、三回目を後期とし、おさづけの理を拝戴した者の中から、中期修了者には修養科修了、後期修了者には教会長資格検定講習修了の資格が与えられた。これまでの修養会とは体制が大きく変わったこともあり、三十九年を施行期として、四十年から本格的に始動した。

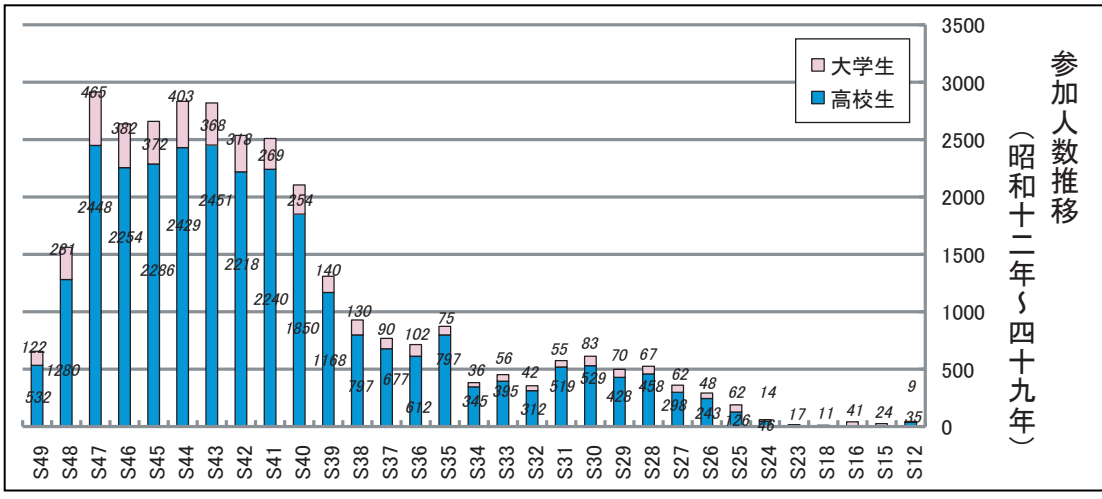
資格を与えられるということは、前期、中期、二度参加する中（約一ヶ月）に、本来三ヶ月間で修了する修養科の内容が、後期については教会長資格検定講習会に相当する内容が求められること

になる。そのため、それぞれ修養科、教会長資格検定講習会を基準として、課目の配列を考慮することとなり、また、それを補う上から、生活態度の中にも厳しく道の仕込みがなされる内容となった。

昭和三十九年の開講式では、当時の内統領小松駒太郎先生が開講の挨拶に立たれ、

新しく発足するこの学生生徒修養会は、今までの修養会とは全く趣を異にしたものでありますから、それだけに参加する学生生徒の方々も、よくその趣旨を諒解され、受講の気構えにおいても、従来の観念を捨てて『このよをおさめるしんぢつのみち』と仰せられる教祖の教を承け継いでゆく、教祖の道の後継者である自覚を堅持して、求道一途のやむにやまれぬ態度をもって終始され、ちばの理に育くまれる生活の中に、自らの心を養い、一手一つに救け一条の体得に努め、用木としての修養に専念して頂きたいのであります。

と、受講に対する心構えを伝えられた。
この画期的な制度を持った学生生徒修養会は、全教に大きな反響を呼んだ。下図の参加人数推移を見ても明らかであるが、資格が与えられるのを機に、最大で二千五百名を超える参加が見られた。



見えてきた課題と改革

これは、それまでのおちば修養会が親里管外の学生生徒を対象としていたのに対し、天理高校、天理大学に学ぶ学生生徒の参加も認められたことも影響している。

ところが、二千名を超える参加者が、十五日という長い期間を共に生活をするだけでも係員の負担は相当なものであった。運営面だけでも追われてしまう現状の中で、全てを充実させることに限界が生じてしまう。加えて、参加回数と資格を与えるだけの内容も消化しなければならぬ。このような現実の中では、受ける側の学生生徒達にとっても消化不良を起こさないわけにはいかなかった。そこで根本を、これまでの大人側ではなく学生生徒側に立つて考え、学生生徒の自主性を尊重する、成人に合ったものへと改革がなされた。そして昭和四十八年には前期の募集が打ち切られ、同四十九年、後期の修了を以て資格付与がなくなることとなった。同時に新たな体制の学生生徒修養会が「日頃おちばに帰参する機会の少ない高校生を、夏休みを利用しておちばに集め、合宿生活を通じて、教義の研修、信仰の涵養につとめさせるとともに、相互の親睦を計ることを目的」として開催された。これが現在の学生生徒修養会の始

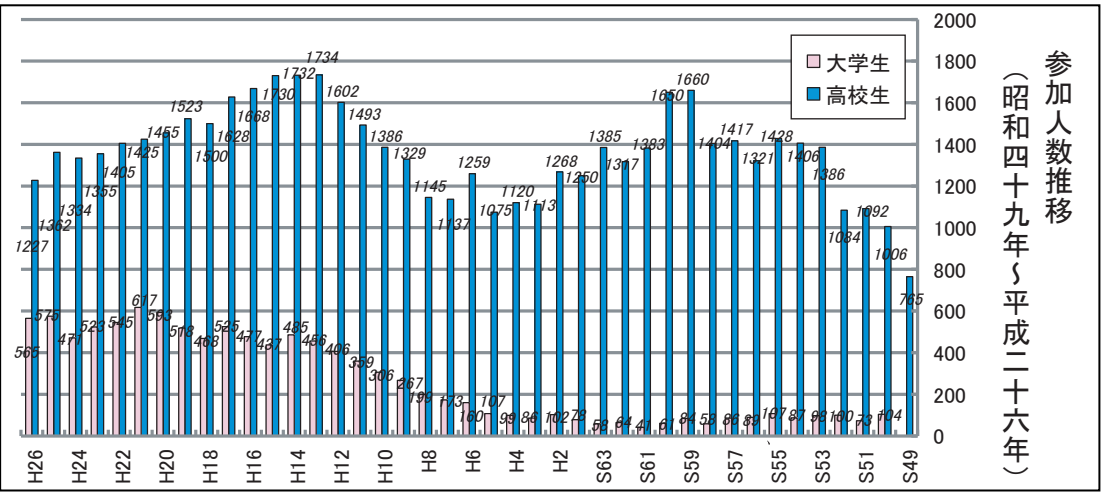
まりである。

改革された項目は、まず教人登録申請の特典が外されたことである。それに伴い、講義の内容も、従来の資格を得るために必要であった課目にこだわらない講義内容に変わった。次に、期間の改革である。これまでは大学も高校も夏に同時開催していたが、大学を三月、高校を八月というように、大学の部と高校の部に分け、期間も六泊七日に短縮された。次に、参加対象も見直しが行われ、上記の趣旨にもあるように、「おちばに帰参する機会の少ない学生生徒」を対象とすることから、天理大学生と天理高校生が受講対象から外された。次に定員を設けた。大学の部は男女各二百人で計四百人。高校の部は男女各四百人で計八百人。人員制限した理由として、宿舎の関係、行き届いた世話取り、膝をまじえて信仰を伝えられるような内容にしていくことに重点が置かれたためである。

学生担当委員会と研究室

学生生徒修養会は、国内布教伝道部講習課、また、学修の宿舎でもある天理学寮北寮の幹事OBによって企画、運営されていた。

平成四年、第六期学生担当委員会が発足すると、学生生徒修養会の事務局は、学生担当委員会に移管されることになる。他の教内行事との連携や、



学生担当者報

影響力までを考え、教内全体における学生層育成の流れの一つとして学修を位置づけ、検討を重ねることとなった。そして、平成六年には高校の部、九年には大学の部のそれぞれに研究室が発足した。目的は「学生生徒修養会高校の部（大学の部）の企画・立案・推進のために置かれた研究機関で、その年々の学生生徒修養会の準備を進めると共に、長期的な視野に立つて、道の学生育成の上に学修が占める役割について考察する」ことである。研究室には、かねてから主だつて学修に携わっていたスタッフや北寮幹事OBが加わり、主に開催後の反省や記録・報告をもとに検討事項を挙げ、話し合い、調整が行われた。

また、平成十八年には、天理高校との相談の末、天理高校第一部自宅生も受講が可能となった。現在も毎月行われている研究室により、年々内容の充実が図られ、高校の部、大学の部共に教内へ広く認知され、学生層育成の上に重要な行事となっている。研究室は今後も、開設当初の目的にある、長期的展望を抱いた中から現在のあり方を考えていくことが重要であり、学生、スタッフが学生生徒修養会に参加した経験を活かし、道の発展に貢献していくことが、学修に求められるところである。

終わりに

昭和四十九年に行われた学修改革に先がけ、三代真柱様は学生生徒修養会高校の部の講師に對し、

……資格を与えるということに意味があるというよりも、私はむしろその人たちの心に、更に成人への過程がこれによって踏まれるということに意味があるので、言葉を換えたならば、これまでよりも更に一層教祖の親心の深きをこの機会に知ることが出来たということが、私の一番求める点なので、それについてはまず第一に、お屋敷でこの講習会をするというところに一つの意味がある。ということとは、やしきの理というものが、やはり言わず語らずのうちに、ただ今私の申しましたその気持を人々の心に伝えるということには、非常に、まあ具体的に意味があるということとで、そしてもう一つは、その人たちの気持が果たして消極的な気持で来ているのか、積極的な気持で来ているのかということにもなるわけで、いわゆる修理を受ける側の心の素地というものも、非常に影響して来るとは思いますけれども、それと併せて今日の場合特に

資格が与えられていた学修				学修以前の修養会				時代	
48	40	39	37	32	24	12	3	昭和	
1973	1965	1964	1962	1957	1949	1937	1928	西暦	
136	128	127	125	120	112	100	91	立教	
学生生徒修養会開催 前期の募集打ち切り（中期・後期のみ開催） 学生生徒修養会開催 体制改革につき試験的に開催 学生生徒修養会開催 資格の制度・体制などを整え、 本格的に始動する 一回目…前期 二回目…中期 三回目…後期 修養科修了資格 教会長資格検定講習会 修了資格 「昭和三十三年 管外高校生・大学生おちば修養会」 より教会本部主催となる （事務局は布教部） 二代真柱様よりお言葉を頂く 管外高校生・大学生おちば修養会開催 「昭和三十二年 管外高校生・大学生おちば修養会」 より教会本部主催となる （事務局は布教部） おちば夏期修養会初開催 いちれつ会主催 昭和十五年「天理教学生夏期修練会」 同十六年「天理教学生修練会」 同十八年「教内子弟修練会」 同二十三年「管外高校生修養会」 「天理教いちれつ会」設立 <td>学修略史</td>									学修略史

学生担当者報

願っていたことは、いわゆる修理肥を施す側の、今日で言えば皆さんの立場であります、その影響というものも、やはり非常に強く表れて来ることと、私は思うんで、消極的な気持で来るのも、積極的な気持で来るのも、これはいろいろとあると思います。しかしそこはやしきの理と、皆さんの修理肥する者の信念と真実でもって、少しでも意図することがそこに現れて来たならば、これが資格があるとかないとかいうことにかかわらずして、将来非常に大きな力となって来ると、私は思いますので、そういう意味から考えて、まあ目先に直ぐその効果が現れて来るかどうかということは、そう求められないかもしれませんが、これも、むしろ十年先、二十年先になって、その効果が現れて来ることを楽しみにして、どうか一つ、学生生徒たちの心に修理肥やしをする役割を果たしてもらいたいと、こういうようにお願いいたします。

と、お言葉を下さっている。

学生生徒修養会は、二代真柱様が道の後継者育成におかけくださった親心に産声を上げ、そして三代真柱様が学生一人ひとりの心の成人を望まれ

た改革の上に今がある。

そして、昨年十一月二十五日に行われた学生担当者大会において真柱様より、

学生担当者に限らず育てる側の者が、まず自ら育つ道を探り、人を育てることを意識することとさることながら、先に立つ自分が育つ努力を意識してすることが肝心でありましよう。自分の都合がつくように、神様を合わせるではありません。自らの心を動かして、自分を神様に合わせるのであります。それにはどうすればいいかと試行錯誤を繰り返しながら、信仰的な身の処し方、心の使い方を学んでいく姿勢そのものが、自分を成人へ導くのであり、ひいてはその姿が人に映って心に響き、結果人が育つご守護をいただけるのであります。

とお言葉をいただいた。学生の心の成人のためには、まず、学生達と関わる私達自身が神様に心を合わせて、自ら成人へ導くことが肝心であると、信仰姿勢を教えてください。

半世紀を経た学生生徒修養会の歴史の上に、歴代真柱様の親心にお応えできるよう、これからの道を担う学生と共に更なる成人への歩を進めていきたい。

現在の学修					
27	18	4	平成	53	49
2015	2006	1992		1978	1974
178	169	155		141	137
学生生徒修養会開催 後期のみ開催 （これを最後に資格付与がなくなる） 学生生徒修養会 高校の部開催 （新制度） 「日頃おちばに帰参する機会の少ない高校生を、夏休みを利用しておちばに集め、合宿生活を通じて協議の研修、進修の励養につとめさせるとともに、相互の親睦を計る」とが目的 ①教人登録申請の資格の特典を外す ②大学生は三月、高校生は八月と分け、期間も短くなる ③天理大学生・高校生を受講対象から外す ④人数の定員を設ける 第六期学生担当委員会発足 「学生生徒修養会」が国内布教伝道部講習課から学生担当委員会に移管される （主催は変わらず教会本部） 「教祖百二十年祭 学生生徒修養会高校の部」より天理高等学校第一部自宅通学生の参加を認める （第十期学生担当委員会） 学生生徒修養会 高校卒業生コース開設 （第十三期学生担当委員会）					

立教178年

こどもおぢばがえり

学生ひのきしん隊

《募集要項》

目的

ぢばへの伏せこみ

内容

わかぎおぢばひのきしんカウンセラー、廻廊ひのきしん受け入れなど

対象

高校生・大学生・短期大学生・大学院生・専門学校生

期間

前期

7月25日（土）～7月31日（金）

後期

7月30日（木）～8月5日（水）

特別期間

7月31日（金）～8月3日（月）

※ 前期、後期に参加できない方も、ぜひ特別期間にご参加ください。

受付時間

前期・後期・特別期間とも午後1時（予定）

解散時間

前期 午前11時、後期 午後1時、特別期間 午後5時（いずれも予定）

募集定員

前期 70名、後期 70名、特別期間 50名

参加費

前期・後期1,000円、全期間2,000円、特別期間1,000円

※ いずれも当日お持ちください。

宿舎

旧大森町詰所（予定）

主催

天理教学生会

後援

天理教学生担当委員会

《申し込み・問い合わせ先》

天理市守目堂町213-4

おやさとやかた真南棟3階

天理教学生会

（郵便）

〒632-8790

天理郵便局私書箱1号

天理教学生会

（電話）

0743-63-1511

（内線5820）

※19時以降は

0743-63-2489

（FAX）

0743-62-5780

詳しくは、天理教学生会 website に掲載しておりますので、そちらを御覧ください。

website URL: <http://tsa.tenrikyo.or.jp>

大学生の集い「Work&Talk」ブロック別 開催一覧

ブロック	日程	会場
北海道ブロック	8月9日14時～10日14時30分	北海道教務支庁
東北ブロック	8月29日13時～30日13時	国立磐梯青少年自然の家（福島県）
関東ブロック	10月3日10時～4日16時	群馬県北毛青少年自然の家
北陸ブロック	10月11日13時～12日14時	富山教務支庁
東海ブロック	8月28日13時～29日15時	天理教名古屋大教会（愛知県）
中国ブロック	8月29日13時～30日15時	天理教笠岡大教会（岡山県）
四国ブロック	10月10日13時～11日15時	香川教務支庁
九州ブロック	8月29日13時～30日14時	大分教務支庁

※詳細につきましては、各教区学生担当委員会までお問い合わせください。

立教百七十八年

《屋外》まなびば研修会 開催報告

たすけあいゝありがとつをひろげようゝ

五月二十七、二十八日、親里競技場とおやさ
と周辺を会場に「立教百七十八年《屋外》まな
びば研修会」を開催（宿舎第十二母屋）。二十
一教区と、韓国、台湾、ブラジル、モンゴルか
らの受講者も合わせ、計五十名が参加しました。
屋外プログラムの魅力は、自然と接する中で
「親神様のご守護」を肌身に感じることができ
ると共に、屋外という「開放感」から心にゆと
りが生まれ、メンバー間との「繋がりが」により
早く深まるという点です。「たすけあいゝあり
がとつをひろげようゝ」をテーマに掲げた今回
は、親神様への感謝の気持ちに合わせ、お世話
になった人達へも「ありがとゝ」の気持ちを伝
えようとのメッセージが込められたプログラム
になっています。
まずAct.（アクティビティ）①「3×3」では、
自然体験を取り入れながらグループ間の距離を
縮めると共に、協調性を高め、自然とメンバ
ー同士の繋がりを作ります。Act.②「フルフゝNight」
では、日没後、グランドゴルフを行いながら課
題に取組み、昼間とは違う雰囲気の中で和気藹々
とグループ間の繋がりを更に深めます。
そして屋外プログラムのメインであるAct.③
「どうも♪ ありが帳♪」では、目隠しをして
植物に触れたり、じつと耳を澄まして自然の音
を感じたり、植物と向き合って心の中で会話を
したりと、自然と触れ合いながら親神様へのご
守護に気づいてもらい、その自然体験の上に、
先生からの『おはなし』を通して、自分から「あ
りがとゝ」を広げられるように誘います。また
各Act.の実習後には、進め方説明及び質疑応答
も行いました。
屋外で活動する機会の少ない現代の高校生た
ちが、日常生活とは離れた自然環境での活動を
通して豊かな感性を育むと共に、身の回りにい
ただく親神様のご守護を身をもって実感するこ
とができる、自らの信仰や友情を深める上でも
大変有効なプログラムです。
ご希望があれば、学生担当委員会のスタッフ
が事前研修にも出向させていただきますので、
今後とも、教区の方々には是非とも屋外プログ
ラムの積極的なご活用をお願いします。

「まなびば」開催会場一覧 《7月開催分》

教区	開催日時	場所	担当者	電話番号
岩手	7月4日12時30分～5日14時	教務支庁		
神奈川	7月4日14時～5日16時	濱華分教会		
福島	7月19日14時～20日15時	教務支庁		

☆実施計画書は2ヵ月前までにご提出ください。

16

立教178年 天理教学生会夏期リーダーの集い 開催要項

【趣 旨】 教区・直属学生リーダーがおちばに帰り集い、活動方針の実践について談じ合う。
その上で、「教祖130年祭」、「教祖130年祭 学生おちばがえり大会」に向かつて全国の仲間と心をついに揃え、道の学生ひのきしんDAYにさらに勢いを持って向かっていくことを決意する。

【日 程】 8月6日（木）15時集合 8月8日（土）16時解散

【参加対象】 各教区学生会・直属教会の委員長及びリーダー層（高校・大学生層）
※学生会が結成されていない直属教会からも是非ご参加ください

【参加定員】 各教区学生会・直属教会3名まで

【参 加 費】 ひとり 1,200円（当日にお持ちください）

【宿 舎】 旧大森町詰所

【内 容】 「立教178年 道の学生ひのきしんDAY」について
「第52期天理教学生会活動方針」の実践について
「教祖130年祭 学生おちばがえり大会」に向けて 等

※全日程の参加を原則としますが、やむを得ず遅刻、早退、中抜けする必要がある場合は、必ず前もってご相談ください。

※申込書をFAXで提出される場合は、FAX送信後に学生担当委員会事務局までご連絡いただきますようよろしくお願いいたします。

【申し込み・問い合わせ先】

〒632-8790 天理郵便局私書箱1号 天理教学生担当委員会 事務局 TEL 0743-63-2489

※申込締切7月10日（金）必着(FAX可) FAX 0743-62-5780

青 空

学生担当委員会の勤務を始めたところから、高
校生のつどい「まなびば」の屋外プログラムの
作成に携わらせていただきました。
学担で勤務するまでは「まなびば」なんて言
葉、全く知らずに学生時代を過ごしました。今
思えば、もう少し直属の学担の先生の話をちゃ
んと聞いとけばよかったなと思ったりして。
勤務当初は、プログラム作成の上でも意味不
明なことばかり。言っていることは訳分からな
い。「ここはこうしよう」「いや、もつとこう
したらいんじゃないか」「高校生に親神様の
ご守護を伝えるには……」毎回の会議がとても
長く、なんで僕がこの会議にいらんだろう。し
かし、同じくまなびばを作るメンバーの方々の
熱い思いや支え、そのプログラムを一生懸命、
学生にしてくださっている先生方の姿のかけ
で、どうにかこうにか務めることができました。
決して得意なこと、好きなことではなかった
かもしれない。そういったことに巡り合えるほ
うが逆に珍しいわけで、その中で僕自身を抱え
て通ってくださり、なおかつ丹精してくださつ
た「まなびば」に感謝したいと思います。
人材育成部局員 山下 秀伸

お 知 ら せ

七月例会

・期日 立教178年7月25日
・時間 15時半受付 16時開始
・場所 東右第4棟講堂

※南5駐車場をご利用ください。

学生層育成者講習会
日程・会場案内

【教区】
・東京 7月4日11時30分～ 教務支庁
【直属】
・愛静 7月20日11時30分～ 大教会
・芦津 7月23日12時15分～ 大教会

報 告

五月例会

五月例会は、五月二十五日に開催された
「教祖百三十年祭 学生おちばがえり大会 学
生担当者決起の集い」内の諸連絡をもって代
えさせていただきます。

各地の動き

【直属学生層育成者講習会】

・日本橋	5月2日	大教会	190名
・高松	5月6日	大教会	100名
・大森町	5月10日	大教会	130名
・伊那	5月18日	大教会	93名
・雨龍	5月18日	大教会	20名
・津輕	5月20日	大教会	180名
・周東	5月21日	大教会	200名
・上之郷	5月21日	大教会	120名
・東肥	5月21日	大教会	103名
・本島	5月22日	大教会	180名

片山委員出向
藤江委員出向
安井委員出向
中田委員出向
秋岡副委員長出向
福江委員出向
深谷委員出向
木村委員出向
吉川委員長出向

Happist 8月号 予告

【特集】 目を大切にしよう！ インタビュー 天理よろづ相談所病院 眼科副部長 大橋 啓一

連 載

・教理コーナー 希望の灯～おやさまのひながたに学ぶ～ 平野 知三（本部准員）

・信仰エッセー 明日の地図ひろげて 安藤 くみ子（本愛大教会長夫人）

・輝く生き方見つけよう Key Person 元飛込五輪選手 金戸 幸

・人生を彩る1冊をあなたに。虹色のしおり 上田 和子（浪華分教会教人）

・東馬場先生と学ぼう！ Happistニュース 東馬場 郁生（天理大学国際学部教授）

明日につながる学生マガジン Happist 8月号

個人宅に直接<Happist>が届く個人購読も行っております。詳細は学生担当委員会事務局までお問い合わせください。

※内容は一部変更になる場合があります。